

## 生駒歌劇の挫折

## 國民歌劇創成と 新地興隆の夢

□な  
5□  
民俗通信

勑 246

△から9年前 大正10年（1921）年8月の雑誌『歌舞』に、生駒歌劇女学生徒募集の次のような広告が掲載された。

生徒募集。大阪市郊外、  
生駒温泉地に新築せる生  
駒大歌劇場へ出演せしむ  
べき女優生徒第一期生、  
七〇名を限り募集す」  
生駒を大阪市郊外とす



「新浦島太郎」一幕、ミユージカル・プレイ「アーティスト・ライフ」一幕、国民歌劇「入鹿物語」四幕、ダンス「ナポリの夕」一幕、喜歌劇「ナポレオンと仕立屋」一幕など、多彩なものだった。

豪華絢爛で高い入場料

劇作や演出を行つてい  
た。伊庭孝、内山平吉、内山繁、渥太郎などが劇団の主な  
メンバーで、彼らは浅草金龍館を拠点にした根岸  
歌劇団に所属し、浅草オペラを隆盛に導いていた  
が、その浅草オペラと決別し、新しい国民歌劇樹  
立の理想を掲げて、新天地を生駒に求めたのだっ  
た。

■生駒新地の繁榮  
大正3(1914)年に大軌電車(大阪電気軌道、現近畿日本鉄道)が奈良—大阪間に開通し、生駒山の東麓に生駒停留所を作った。実物を「く」の物を作るなど、贅沢(ぜいたく)極まるものであったといふ(内山惣十郎『浅草オペラの生活』、1967)。

(生駒座・生駒演舞場)  
移築したのが生駒馬鹿城  
で、大正10年3月1日に  
落成したばかりだった。

「一ノ瀬が山上まで伸びて、生駒山遊園地が誕生するのは昭和4（1929）年である。

所が設けられる。ここから中腹の宝山寺まで一三町の新しい参道が開かれ、この新しい道沿いに料理屋や旅館が建ち並び、生駒新地としてその後急速に発展することになる。

新たな市街  
は「新道」と

福井は大軌の後援で、生駒山上に一大遊園地を作る計画を持つていたようだ。宝塚のようなオペラの常設公演をしたいと、いう意向で佐々と伊庭に交渉があったという（山前掲書）。鉄道やケーブル敷設による新たな門前町開発の大きなうねりの中で、移築した演舞場を劇場化して、芸妓の歌舞公演だけでなく、新しい娯楽として浅草オペラを生駒騎に誘ったのが彼だった。

は近鉄生駒駅より新生駒参道を一〇分ほど歩いた所に生駒劇場はあったといふ（「大正期、生駒山麓にあつた音楽の殿堂」『乱声』10号、2003）とし、また作曲家佐々紅華にゆかりの演出家・清島利典氏は「生駒山を登る近鉄生駒ケーブルの最初の駅と二つ目の駅の間のあたり」（2007年6月15日付、日本経済新聞）とした。

と呼んでいたという。生駒劇場は、その後も映画館として昭和10(1935)年頃まで利用され、のちに取り壇されたといふ。

写真に見るような重厚な演舞場が現代に伝わっていたら、国民歌劇創成と歌劇による新興生駒の繁栄を自論んだ二つの夢を伝える、近代奈良の文化的シンボルの一つとなつていただろつ。(しかたにいさお)本

10

17

を導入しよ  
うとしたの

大阪朝日新聞大和版（大正10年8月10日付）

であった。  
歌劇の資

生駒の歌劇  
生駒劇場では専專  
歌舞第一回夏期公

金は福井か  
提供してい

を十日午後止三時  
一箇月間毎日開演し日曜、祭日、  
月十六日等は二回定期演、正月も

たが 入場

時からの著述題及出演者左の如く